

## 《薬局サーベイランスコメント》

『2018年第1週のインフルエンザの推定患者数は約57万人と僅かに減少したが、第2週以降は急増し、インフルエンザの流行は本格化していくと予想される』

2018年1月9日  
済生会中津病院感染管理室  
安井 良則

今シーズン（2017/2018年シーズン）の2018年第1週（1月1日～7日）のインフルエンザの推定患者数は、薬局サーベイランス（<http://prescription.orca.med.or.jp/kaniyasuikei/index.html>）によると560,450であり、前週（第52週）の値（571,230）より僅かに減少しました（図1）。週明けの月曜日（2018年1月8日）の推定患者数も41,469と前日より更に減少がみられています。ただこれらは冬季休暇および祝日の影響を強く受けている結果であり、本日（1月9日）以降患者数は急増する可能性が高いと思われます。

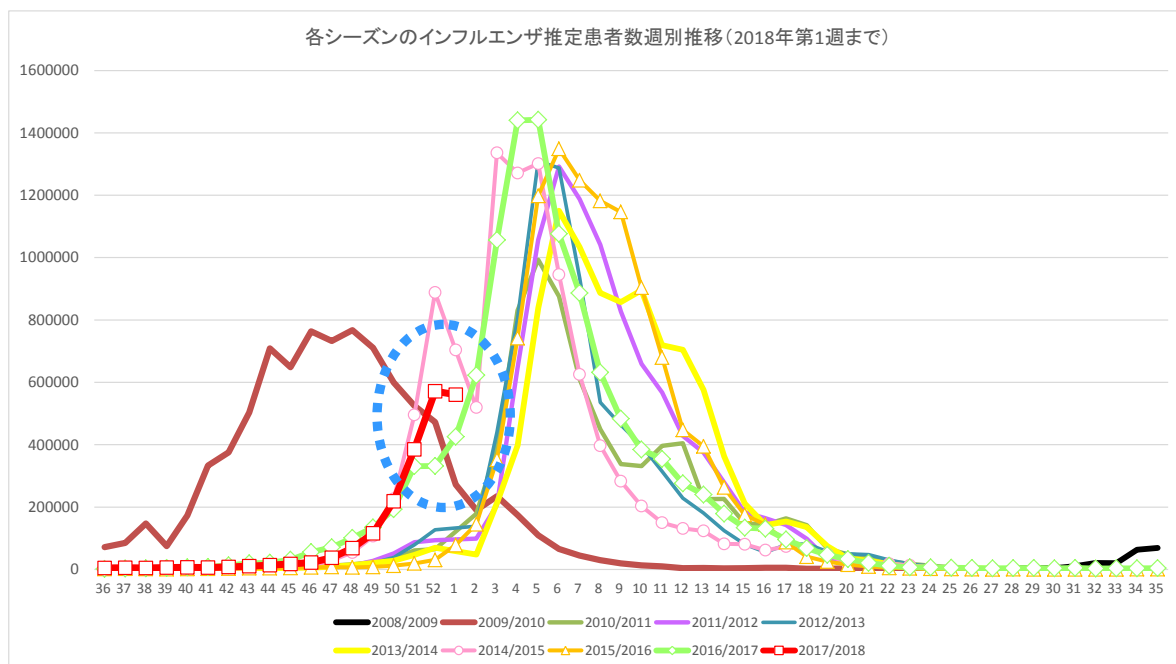


図1. 過去7シーズンと今シーズン（2017/2018年シーズン）の第36～第1週までのインフルエンザ推定患者数の週別推移（2018年第1週の推定患者数= 560,450）

各都道府県別の第52週の人口1万人当たりの1週間の推定受診者数をみると大分県、宮崎県、福井県、広島県、岡山県、熊本県、長野県、静岡県、奈良県、北海道、徳島県の順となっています。47都道府県全てにおいて増加が見られました。

各都道府県別の2018年第1週の人口1万人当たりの1週間の推定受診者数をみると福井県、宮崎県、大分県、熊本県、北海道、鹿児島県、静岡県の順となっていて、九州地域でのインフルエンザの流行が目立ちます。

2017年第36週から2018年第1週までの累積の推定患者数は2,063,270であり、2017年10月1日現在の人口統計を元にした累積罹患率は1.63%でした。年齢群別での累積罹患率は5～9歳(7.60%)、10～14歳(4.92%)、0～4歳(4.03%)、15～19歳(2.00%)、30～39歳(1.60%)、40～49歳(1.54%)、20～29歳(1.27%)の順となっていて、14歳以下が流行の中心であることに変わりはありませんが、第1週は30歳代、40歳代の患者数の増加が目立ちました(図2)。

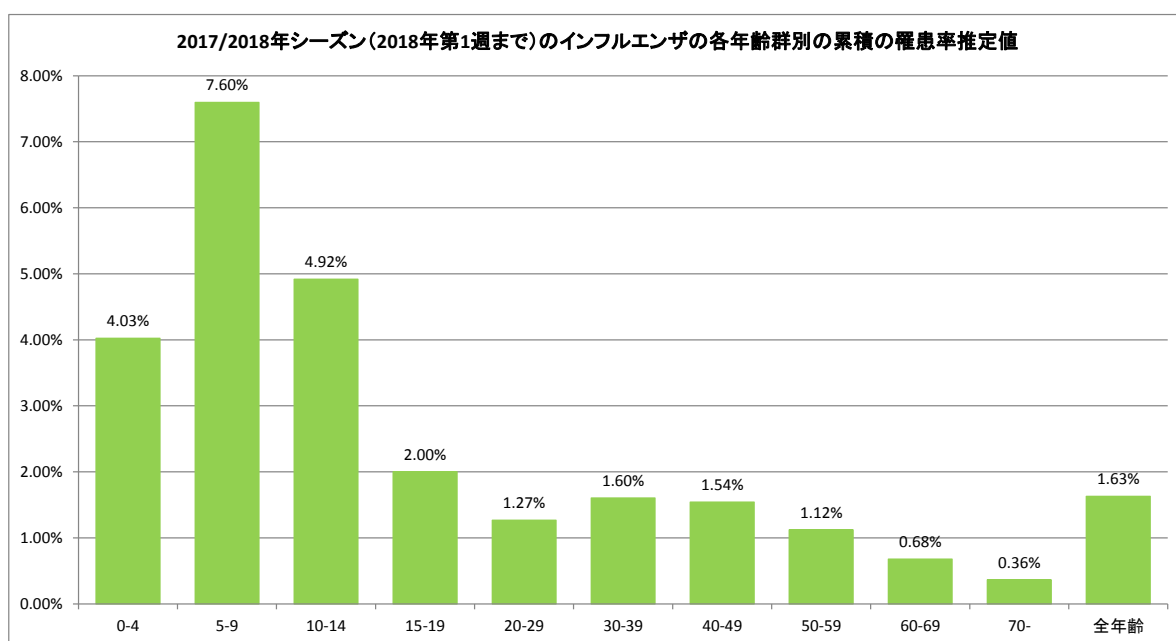


図2. 各年齢群のインフルエンザ累積罹患率の推定値(2017年第36～2017年第51週、累積推定患者数=2,063,270)

国立感染症研究所感染症疫学センターの病原微生物情報(<https://www.niid.go.jp/niid/ja/iasr/510-surveillance/iasr/graphs/1532-iasrgv.html>)によると、今シーズンこれまでのインフルエンザ患者由来検体から検出されたインフルエンザウイルスは、およそ半数がA/H1pdmであり、次いでB型、A/H3(A香港)亜型の順となっています。B型では山形系統が大半を占めています。

2018年第1週のインフルエンザの推定患者数は、前週より僅かに減少しましたが、冬期休暇が終了した第2週以降は急増し、インフルエンザの流行は本格化していくと予想されます。今後ともインフルエンザの患者発生状況には注意が必要です。